



2年生になる春、安良里診療所で実習をさせて頂いた。一年間、医学の世界を身近に感じながら過ごしてきて、何となく価値観が固定された狭い世界、興味の対象が「現にそこにあるもの」になりやすい環境にいる気がしていた。このままでは、患者さんとお付き合いするようになってから、現に存在する「病氣」にしか目が行かなくなるのではないかと、患者さんの代名詞が病名になってしまうのではないかと、という不安を抱いた。そこで、全

全人的医療を自分の目で見てみたい!!

訪問先：

(社)地域医療振興協会
安良里診療所 (藤原靖士先生)
(静岡県加茂郡加茂村)

レポーター：斉藤 彩子
筑波大学医学専門学群3年

人的医療というものを自分の目でちゃんと見て、医療と人との関わり方を改めて考えてみたいと思い、安良里診療所での実習に踏み切ったのだ。

診療所は安良里のほぼ真ん中、どこに住んでいるお年寄りでも歩いていける距離にある。道や海岸などの日のあたる明るいところにベンチや椅子が置いてあり、お年寄りがおしゃべりをしたり将棋をしたりしているところに行き会う。私も彼らのおしゃべりに加わった。



話をしている中で、彼らがいくら年をとっても「余生」を過ごしているのではなく、「今を生きている」感じを受けた。今の自分に出る生き方を生きているようだった。診療所に来た時は家族に連れられていて、年寄り扱いされてあまりしゃべらなかつた方も生き生きとしていた。自然と集まってきて一緒に時間を過ごし、話したいことを話し、話を聞く。ほぼ同年代同士のバランスの取れたコミュニケーションの場が彼らを元気付けていた。

もう90歳近いのに、一人で気丈に暮らしている方もいた。足が利かない。それこそ部屋の中を這って生活している。しかし「家が診療所のすぐ前で先生が近い所にいるから安心できる。それに近所の人たちが家の前に野菜や魚や果物を置いていってくれる。だからやっていける。」と言う。自分の信念に沿って地に足をつけて生きている彼女を見て、そう生きることが許される、そして可能になる環境が周りにあることが私にも嬉しかった。

私が出会ったお年寄りは、診療所、地域、と言う大きな支えによって病気や体の心配が中心の生活ではなく、自分の生活を送っていた。つまり、診療所の役割の一つが、患者さんの生活に沿った治療方針を立て、自分たちの生活のリズムを中心に病気とうまく付き合っていけるようにサポートすることなのだ。

夜間に来る患者さんに、安良里地区の人が少ないのはなぜかという、初日に先生から出された問いに、一晚頭を悩ませて解けなかつたが、実習を終えた今なら、その答えをよく理解することができる。先生に教えて頂いた答えは、次のようなものだった。

もちろん、他の地域の病院で夜間の患者さんを受け入れられない、ということもある。だが一つに安良里地区の人々の心遣いがある。昼間先生は忙しいから夜は休んでももらわないと…、と。そして安心感がある。今すぐ、夜中に診てもらわなくてもいつでも先生は近くにいるんだから…。

診療所は地域の人々に医療提供ができるような支えをもらっているのだ。

地域に根ざした医療を行うには地域の人々との信頼関係を築いていくこと、バランスのとれた心の距離を保ちながら長く人々と付き合い合っていくこと、が重要になると思った。

今回の実習では地域から見た診療所、診療所から見た地域、をじっくり考えることができ、私の中で価値観が新たに編成され、自分がどのような医療を実現させていきたいのか、未来に向かう強い力を手にできたと思う。

さらに詳しい報告は、こちらまで
<http://plaza.umin.ac.jp/~pc-tkb/>
 「プライマリケア研究会」